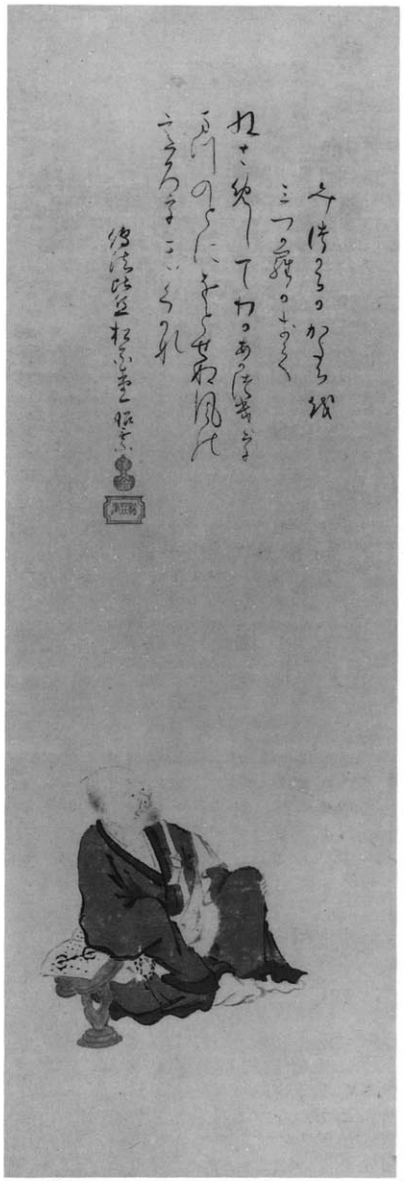
美術の窓(48)

松花堂昭乗の芸術生活

大和文華館館長　吉川逸治

松花堂昭乗翁は、堺の出身と伝えられ、若くして京に上って仏道に励み、男山石清水八幡宮の滝本坊にあって、真言密経を修め、阿闍利法印の位を許されるに至りました。書は、寛永の三筆として名高く、青蓮院流をはじめ、空海の書に惹かれて大師流を学び、仮名の書では上代流を身につけ、ついには彼独自の流儀を開きました。松花堂の書風は松花堂流あるいは滝本流と呼ばれて、長く継承されてまいります。また、連歌や和歌を詠み、茶湯にも造詣が深く、まさに江戸時代初期の文化的な指導者の一人と言えましょう。松花堂昭乗の蒐集した茶道具は八幡名物と呼ばれ、今日、高い評価を得ています。これは、そこに前代には見られない松花堂独自の美意識の反映が認められるからに他なりません。この時期には、近世的な美意識の萌芽が見られますが、松花堂も先駆的な役割を果たした人物にあげられます。彼は公家衆など都の上流社会の芸術愛好家や学識者らと親しく交際し、小堀遠州とは遠縁にあたるという当時としては最も洗練された芸術的環境の中で、このような美意識を醸成いたしました。

この秋は、特別展にこの松花堂昭乗を取り上げ、彼の絵画と書蹟を展示します。彼は絵画においても、着彩画、水墨画ともに試み、大和絵風の人物図から謹厳な筆致の仏画まで幅広く本格的な作画活動を行なっており、晩年には、独特の水墨画の様式を確立しました。「自画像」もその一つです。画面には、脇息にもたれ、片膝を立ててもの想いにふける好好爺の姿が描かれています。一見、略筆で描いたように思われますが、墨色や筆致は実に慎重に選択され、丁寧に仕上げられています。日常の姿そのままを表現しようとしたのでしょう。肖像画特有の観賞者に迫るような威圧感や晴れがましさは微塵も無く、我々の視線にすら気づいていない様子です。しかし、この人物には、穏やかではありますが、人間的な感情が確かに脈動しています。人間性を謳歌する人間主義とでも言うべきこの時代の特色が窺えます。



重要美術品　自画像　松花堂昭乗筆

季刊 美のたより No.104
平成5年8月19日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.